

文部科学省 科学技術・学術審議会 生命倫理・安全部会
特定胚及びヒトES細胞等研究専門委員会(第83回、平成25年6月6日開催)
における動物性集合胚に関する委員の主な発言について

- 動物性集合胚については、動物の胎内に移植した後に、発生する動物胎仔の中で、ヒト由来の細胞が神経細胞や生殖細胞へ分化しないようにする等の分化制御技術の問題がある。分化制御技術の精度などについては、実際にやってみないとわからないことが多い点がなやましい。
- 作成された臓器の移植を行うには、ドナー動物が有するヒトに対する未知の感染症などの安全面で考慮しなければならないことがあり、その点を踏まえた議論も必要。
- 動物の発生の早い段階でヒトの細胞を導入するほど、動物の体の様々な部位にヒト由来の細胞が分化する可能性が高まっていく。動物性集合胚の研究の必要性について議論をするのであれば、妊娠中の動物胎仔へヒト細胞を移植する技術や、個体になった後にヒト細胞を移植する技術などの他の技術も含めて議論しなければならない。
- 動物性集合胚については、基本的に動物だから解禁してよいという単純な議論にはならず、例えば、ラットとマウスのキメラ個体でも配偶子が形成されることが明らかとなったため、技術の検証をしっかりとした上で今後の議論を進めるべき。
- 特定胚指針では取扱うことができる特定胚を限定している。このことはクローン法で認められている以上の規制がかかっている状態であり、この点も考慮して議論を進めていくべき。

文部科学省において整理したもの